

マルチメディア時代の印刷業

凸版印刷㈱ 取締役 大庭 幸雄

昔、印刷会社は単にインクを紙になすりつけて商売をしていたが、その将来性が難しくなってきたとき、ニューメディアからマルチメディアの時代がやってきた。凸版は週日信州のヤマネを主題としたドキュメントを作って放送したが、印刷と映像や音などを並列に使用し、1つのソースからいくつかの商品化をして利益を出すという、いわゆるマルチメディア構想に将来の活路を求めている。

マルチメディアの定義は人さまざまであるが、キーワードはコンピュータ、インタラクティブ、デジタルの3つ。われわれはこれを「文字、図形、写真、音声、映像を組み合わせ加工して情報を伝達する環境を指す」と表現し、客のニーズに適合したシステム・環境を選択し作っていきこうとしている。活字の世界ではデジタル化は早かった、植字工が活字を拾ったのは昔の話、CTS (Computer Type Setting) の今、どんな形、組版の本も自由に素早くできる。印刷会社の中にマルチメディアをむかえる環境はできていると考えてよい。

別紙の具体例から主なものを拾ってみよう。CD-DAはそれまでのアナログ形レコードを駆逐したが、カラオケに端を発してこのCDに動く絵を入れることの実用化がようやく始まっている。やがて1時間の映画が入るだろうし、さらに自分で録画することも可能になってくるはずだ。

これまでのビデオはその1駒を時として新聞が写真にする程度だったが、ハイビジョンの出現が印刷とビデオの境界をあいまいにし、これが現在のマルチメディアのスタートになった。さらに2000×2000のUDTVが開発されるとあらゆる業界の壁がなくなって多くのメディアが自由に相互変換できるようになる。CGで実際の製品なしに設計図から直接にカタログ写真ができるようになった。たしかに本物そっくりの写真ができるのだが、なぜかその絵に素材の重みを感じられない。バーチャルリアリティの世界もこうした基本的な問題の解決が必要だろう。

通信の発達もマルチメディアの世界に意外な面をも

たらす。たとえばカラーフィルム原稿もこれを現地でデータにして通信回線経由で伝送すれば税関を通過せずに国内に入ってくる。コダックの電子カメラDCS100はまだ130万絵素だが、報道にはほぼ十分、さらに高精細化すればスタジオカメラとして使えるが、カラーマッチングが難しい。データとなった写真はどれが本当の色かわからないのだ。本来加法混色と減法混色の世界を一緒に扱おうとするところにやや無理が見える。

マルチメディア社会はいつ実現するだろうか。ファイバー・トゥ・ザ・ホームの前にトゥ・ザ・オフィスの時代がくるから、これが企業におけるホワイトカラーの生産性向上に大きな役割を果たすことになると考えて検討を進めている。結論はまだ出ていない。

Q: この20年の間に印刷業務はどれくらい変化したか、また今後20年にどう変わるか。

A: 20年前の仕事の4割が紙への印刷の仕事から他の素材への印刷加工に変わった。今後は感性の時代、物好きな人間、好奇心のある人間が必要になる。

Q: マクルーハンのように考察してマルチメディア時代の人間はどのようになるか。

A: コンピュータに親しむ人間の像が見える。創造の社会ではこれまで異端者と見られていたような人間が意外に面白い仕事をする。明確な将来の展望は難しい。

Q: 三種の神器がといわれた時代と比較してマルチメディアは人間のどんな要求を満足させてくれるのか。

A: とにかく情報がほしいという戦後から100万部単位で月刊誌が売れた時代を経て、専門誌、お宅向け雑誌、同人誌と次第にセグメントされた情報を提供してきた。選択範囲の拡大と理解の高度化がマルチメディアの基本で、それが先に環境といった意味でもある。

Q: どんなどころホワイトカラーの生産性向上の効果があるだろうか、効果をどのように計るか。

A: 情報伝達は改善されるだろうが効果はまだ未知数だ。

1994年度春期 4月14日 防衛庁のOR活動

本多明正氏 (防衛庁)

5月11日 写真画像の将来

内田康夫氏 (コニカ㈱)